

まとめ(詳しいバージョン)

主催 地球救出アクション 97、原子力資料情報室、ヒバク反対キャンペーン

連絡 稲岡美奈子 090-7090-1857、Eメール minako-i@estate.ocn.ne.jp

時間割 10:15 打合せ、 10:30-12:00 復興庁、 13:00-14:30 文科省、 15:00-17:00 交流会

交渉政府側出席者 (交渉の設定は福島みずほ事務所)

復興庁: 参事官・井浦義典、 参事官・西山理行、 企画調査官・栗林大輔、 参事官補佐・木全智己

参事官補佐・下出大介、 主査・佐藤堅太、 主査・淵田祐介

文科省: 初等中等局教育課程課課長補佐・名子 学、 初等中等局教育課程課専門官・橋本郁也

第1回の署名提出 署名数は9125筆

復興庁へは大概研司さん(福島県教組)、文科省へは溝田一成さん(上関原発止めよう!広島ネットワーク)が福島みずほ議員立ち合いで手渡した。

参加者 関西、関東、静岡、広島、福島の教員、市民、市議員、反原発団体など40人が参加し、大阪から福島事故避難者の森松明希子さんも駆けつけた。

復興庁交渉 下線は注目点、二重線は回答約束

I 「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略」に関する質問への回答(要約)

1 コミュニケーションの対象を「児童生徒及び教師等教育関係者」とした理由

児童、生徒へのいじめの問題をはじめとした原子力災害に起因するいわれのない偏見や差別の背景には、放射線に関する正しい知識と理解の欠如と、福島県の現状に対する認識不足がある。

特に、価値観の礎となる児童生徒への教育では、正しい知識を持った教師等が授業で使いやすく、児童生徒がわかりやすいコンテンツを基に正確な情報を伝える必要がある。

2 教師の教える内容を強化戦略で決めてしまっているが、許されるのか。

風評払拭リスクコミュニケーション強化戦略は関係省庁が連携して情報発信するために取りまとめたもので、放射線副読本の見直しはそれらの一つ。

3 「放射線の有無ではなく量が問題になる」ならば、健康影響と放射線の量はどのような関係か

被曝線量が100ミリシーベルトを超えるとガンになり死亡するリスクが増えることが科学的に明らかになっている。強化戦略でも述べている。

4 100mSv以下の被曝であっても、もし検出できなくてもリスクが上昇することはわかっていますね。

趣旨不明で、回答しかねる。

5 20mSv以下での避難指示解除は被曝の危険性軽視

健康リスクは喫煙や飲酒等の発ガン要因と比較して十分低いものであること、また適切な放射線防護措置を取ることにより十分リスクを回避できる水準であることとを踏まえ、設定された。

詳細については原子力災害対策本部の支援チームに聞いてください。

6 ICRPの年間1mSvの勧告があるが、日本では公衆を、1mSvを超えて被ばくさせてもよいのか

政府としては、長期目標として個人が受ける追加被曝線量が年間1mSv以下になるように目指す。避難指示解除後の個人線量測定や放射線相談体制の支援など、総合的、重層的な防護措置を進めることにより、被曝線量の低減を図っている。

7 復興庁は事故による健康影響のある可能性を否定するのか。先天異常の発生率の上昇は認められていないという表現について、しっかり調査しなければならないと考えるかどうか。

福島県民健康調査の結果等を根拠に記載している。当然、専門家の間で共通認識になるような新たな知見が得られた場合には、今後の対応を検討する必要があると理解している。

先天異常の発生率では福島県民健康調査の結果では、全国的な動向と差がないとされていることや、UNSCEAR2013年白書でも、原発事故による先天異常の発生率が上昇することは予測されていないとさ

れていることは承知している。

8 食品の基準についての質問で、世界で最も厳しい基準を設定しているとの表現を正すべき

科学的なものに基づいて記載させて頂いている。最も厳しい基準が正しくないという根拠が不明。

9 発信の中での相対化は間違いとの指摘について

放射線に関する正しい知識や被災地の復興の現状等について広く情報発信を進めるに当たって、発信内容を理解しやすいよう工夫する必要がある。科学的根拠も踏まえた総合的判断としてご指摘の記載（野菜不足など）を盛り込んでいる。

10 参議院付帯決議の「放射線が人の健康に及ぼす悪影響について、科学的に十分に解明されていないことを踏まえ、健康影響に関する調査を継続的に行うこと」について

現時点の知見において記載できることを記載しておりまして、ご指摘は当たらないと考えている。福島県が実施する県民健康調査をはじめ、放射線による健康影響については、引き続き調査がされていると認識していて、この付帯決議はしっかりと履行されている。

II 全体の討論（要約、編集）

質問書の前半、放射線副読本改定の経緯について、回答できないとしていたが、実質討論した。

1 「副読本の作成主体は文科省である」としていたが当然見直し改定については、復興大臣から指示

私たちから「復興庁の風評払拭リスク強化アドバイザー会合第3回（平成30年1月29日）で、文科省の初等中等教育局長を呼び副読本について有識者の先生方と協議している」と指摘すると、

（復興庁）これを見る限り意見が述べられているのは間違いないと思います。ただし報告ということで、ただアドバイザー委員の有識者の方々がアドバイスをされているんだと思います。この副読本、作成したのは文科省ではあるが、当然見直し改訂については、風評払拭のタスクフォースにおいてうちの復興大臣の方から指示は行っている。放射線の基本的事項や健康影響について、戦略を踏まえ見直しを行うようお伝えしているが、具体的な取り組みは文科省の方で対応した。

（私たち）専門家の委員が具体的にこの文章おかしいとか言ってますよ。

（復興庁）復興庁は方針というのをまとめて言ってい

る。放射線の基本的事項とか健康的影響とかで、各省庁が出しているもので不足していたりすれば、きちんと見直して下さいねということを、この副読本に限らず申し上げている。

2 質問書1～4について文書回答要求

（司会）さきほど出ました文書回答は前向きに検討していただけるということによろしいですか。

（復興庁）内容については文科省さんが基本的に回答されると思っております。文科省さんとも話をさせていただき、またこちらでも精査させていただいて、できる部分は回答させていただければと思います。

3 副読本の予算が今回、東日本大震災復興予算から出ているので復興庁の責任が重いと追及

（私たち）この副読本の予算が東日本大震災復興予算から出ています。

放射線副読本は少なくとも3年生までは歯が立たないという内容です。ルビを打ったら読めるという内容ではありませんよ。読めもしない子に配布するのは不当な予算執行ではありませんか。

（復興庁）おっしゃることは理解できます。復興庁が予算でやったからには、復興庁がきちんと見ると、いうことだと思いますし、それはそういう認識でもございます。リスクミ戦略の方針に合致しているかどうかという観点からのお話になると思います。ちょっと検討させてはいただきますけど回答できる限りの回答をさせていただきたい。

（私たち）たとえば避難者の住宅問題とか、すごく困っています。こちらに使うべきです。小学校低学年、中学年まで配ったのは不適切な予算の執行だと思います。

（避難者）復興予算で全部の小中高生に行き渡るようにしている、しかも内容に疑義があるということも、放射線のホントの時から原発被災者や避難の人たちは訴えている。副読本の問題と放射線のホントはほんとにリンクしていて、さきほどおっしゃっている内容もそうですし、そもそも風評払拭リスクコミュニケーションの名のもとに被害を無いようにしているところがおかしいとずっと訴えてきたけれども、全ての子供たちに復興予算を使って全部配るというおかしい段階に来ている。当事者としてもおかしいと思うし、子供をもっている母親としてもおかしいと思っています。

(復興庁) いろいろ問題が起きているときにいじめの問題につきましては、児童生徒さんに正しい情報を知っていただくこと、それから教育に当たる方々に正しい情報を知って頂くことが優先的な課題だと。

(避難者) それは風評でない実害だと福島県内の人も全国の避難者も言っているのに。放射線のホントでも足りないから、今回は副読本に名前を変えて小中高の子供がいる全戸には配布できるという形になってやしませんか。いじめや生産者たちの風評を払拭するためだというけれど、事実はそれに反していることが起きている。復興予算をどんどん突っ込んでいます。

(復興庁) (予算を使ったことの) 状況確認は復興庁としてもしたいと思っておりますので、効果という言葉を使うかどうかはわかりませんが、使った状況を確認させて頂きたいと思います。＜学校を責めないように私たちは要求した＞

風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略の内容について

1 放射線の安全だけ伝えて、危険なことは隠す

(私たち) 空間線量だけでなく、土壌汚染が理由でまだ自主避難している人がいるのに、安全の方だけ伝えれば自主避難への理解が減って、それがまた逆のいじめになるということを心配していますが、意図的に危険なことを隠すことが正しい情報なのでしょうか。

(復興庁) そこは自信を持ってお答えできますが、そういうことは全くありません。ご意見を踏まえまして、より正しいというか包括的なといいますか、完全なといいますか、情報発信に努めます。

2 100mSv 以下の被ばくの被害はないのか

(復興庁) ICRP によれば放射線防護の立場から、つまり防護側に厳しく立って、ある仮定に基づくものが LNT モデルというふうに言っております。その仮定というのは年間 100mSv を下回る放射線量においては、放射線による影響の増加を明確に示すデータの無い低線量域であってもガンリスクはあるものという仮定と、それからバックグラウンドの線量を超えた線量の増加に比例する、グラフでは直線になる、仮定に基づくものが LNT モデルというふうに言っておりまして、同時に LNT モデルを明確に実証する治験はすぐに得られないと明示しています。また、ICRP は現在の疫学的方法では 100mSv までの被ばくによるガンリスクというものを直接明らかにすること

はできないという専門家の一般的な合意があるというふうに行っているところと認識しております。

(崎山) LNT モデルが実際的にも有用だし、これ以上のモデルというのは考えられないということ、アメリカの放射線防護審議会が去年出した、コメンタリー 27 というのがあり、はっきり LNT モデルというのは証明されています。100mSv 以下について証拠を示すデータが無いというのは、2012 年の 12 月に低線量ワーキンググループが出した報告から (ICRP に関係している) 専門家は進歩してないということです。

2012 年 2 月の原爆被爆者の寿命調査 14 報というのが出て、それ以降スイスやイギリス、オーストラリアで集団の大きい疫学調査が出て (もっと低い線量被ばくの影響が示されて) います。

安心、安全、大丈夫ということをお子孫たちにずっと伝えていくと、子供たちは安心なんだ、放射線は大丈夫ということで平気で被ばくしちゃうと思うんですね。子供たちが自分たちの健康を守るための知識を無くして、無防備にさしてしまうということは、将来の子供たちの健康に影響します。

(復興庁) だから線量高いところへ行って、被ばくしていいですということは当然言っておりません。

(私たち) 20mSv で 5 年。100mSv ですか。

(復興庁) 復興庁が決めていることではなくって、原子力災害対策本部の原子力災害被災者生活支援チームの方で検討された。健康リスクはほかの原因、喫煙や高塩分食、他のリスクに比較して十分に低いこととすとか、あるいはここで適切な放射線防護措置、線量の高いとわかっているところに行かないとか、そういうことを含めてですけれども、そういうことを講ずることにより十分リスクを回避できる水準であるということなどを踏まえて設定されたというふうには書いております。

たとえば国立がん研究センターだとか含めて、また国際的に専門家として共通認識となるような知見という言い方をさせていただいた。研究の成功・成果といったものもあるでしょうし、世界を見ればいろいろあるかと思います。専門的にちゃんと検証して集約して最低限こういったものが言えるといったものが、我々が拠る所に行っている ICRP の報告書とか成果だと思っております。

(私たち) 今いろいろ名前が出ている UNSCEAR 国連科学委員会とか私的な機関ですけど ICRP と

か、これみんな原子力推進なんです。だからそういったところが認めたものを拠り所にしてたら、いつまでたっても人の安全は守れないですよ。

(私たち) 基本的に原子力推進の人は彼らの世界のネットワークの中で認識されたことしか認めないから、現実の問題に対して、国民の安全を守れない、そういった政策しか出せないんですよ。

(復興庁) 推進、反対どちらかだからということは考慮しておりません。えー、ただおそらく推進派の話が出ているというのは、推進しているからこそ危険性を認識したうえでの研究、データの積み重ねだと思います。

(私たち) 私と参事官さんの解釈が違うと思いますが、参事官さんの解釈の根拠になる ICRP の条文、出して頂けませんか。何番の параグラフなのか。たとえば ICRP 2003 の параグラフ何番なのか。それ全部ちゃんと出して頂けませんか。次回は。それ資料出してください。

(復興庁) 確認させていただきます。

(崎山) NCRP アメリカの放射線防護審議会、2018年、コメンタリー27というのが出ています。そこにLNTモデルをこれから放射線防護に使うのにいいかどうか、LNTを支持する論文がどのくらいあるかということを検討しています。29報検討して、20報がLNTモデルを支持するというので、これからの放射線防護に関してはLNTモデルをずっと使い続けることを勧告すると書いてあります。そこに100mSv以下が証明困難だというようなことが書いてあるかどうか、ちゃんと読んでください。NCRPもやはりICRPよりもうちょっと核産業寄りで、批判的に見なければいけないところもあるけれども、それでもちゃんとLNTモデルを防護に使うということを書いてあります。

3 「強化戦略」のひどい記述に関して

(私たち) (副読本のような) おかしなパンフをまかれることによって、放射線防護の数字もあいまいにされると、よけいにいじめが広がるし、風評払拭と言ってるけど、何を信託していいのかわからなくなって結局売れるものも売れなくなるということを今日ご理解いただきたいと当事者からもお願いをしたいと思います。

(復興庁) 我々として当然不正確なことをお伝えするつもりはございませんし、風評払拭の対策が風評だと

言われることがたしかにあってはならないと思っております。今後ともしっかりと正しい放射線に関する知識の普及というのは続けさせていただきたいと思えます。

(私たち) 喫煙と20mSv被ばく、だいたい同じくらいと思っておられるのか、食事の習慣と比べ続けるのかということなんですけど。副読本に書いてあるんですよ。放射線のホントにも書いてある。

(復興庁) そういったご指摘があるということも承知しております。ただ、副読本にも書いてありますし、ほかにも書いてあるものですが……。

(私たち) 書いてある、「強化戦略」に。「強化戦略」に書いてあるから副読本にも書かなければいけないんです。

(復興庁) はい。相対的な比較という言い方していますが、極力やるべきでないとする書物もあるとは思いますが。ここで引用してきているのは国立ガン研究センター、これがガンのリスクが高まるというだけでは、具体的な健康影響の大きさがわからないということに答えるために、「わかりやすい放射線とガンのリスク」として公表しているものでございまして、わかりやすさの観点から用いております。疫学研究を取りまとめた科学研究にもとづいているものと認識しております。

20mSvは危険でないというか、20mSvであれば長期的に対策がとれる水準だと判断しているというふうに「原子力災害からの復興・加速」というものに書いてあるということでございます。

福島県民健康調査の中に甲状腺についても調査をしています。これは当時子供だった方々、胎児だった方々も含めて調査を続けています。それによりますと甲状腺ガンの方は確認されてはいますが、全国と比べて特に多いということではない。放射線の影響とは認められないということが県民健康調査の検討委員会では言われています。

内容の詳細については確認させていただきますが、さきほど申し上げた発言の根拠は、甲状腺検査が行われていまして、いま40名発見されているところですが、先日7月6日に県民健康調査の検討委員会が開かれて、そこで放射線による影響ではないということが報告されて、その一ヶ月後くらいに新たに承認されているというのが報道されていますのでそれを根拠に発言いたしました。

(私たち) 多発はみんなが認めています。県民健康調査の決定として「放射線影響が証明されなかった」ということだと認識しています。放射線の影響がないということが証明されたわけではありません。これから継続的に調査されるべきです。

(私たち) その前の話に戻りますが、野菜果物とガンの関係の話ですが、国立ガン研究センターのホームページに予防研究グループというページの野菜果物と全ガン、循環器疾患との関連についてというページが

あります。そこに論文を上げて、野菜果物とガンの関係を否定する研究が多いということをはっきり書いています。だからこの副読本の表で野菜果物、塩分不足とガンのリスクを比べるということ自体、根拠が否定されていますから、これも間違っています。よく調べて、回答をお願いしたいと思います。

(この報告を読む人に役立つと考えて、崎山さんのみ、専門家の発言として名前を出させていただきました。)

文科省交渉 回答(要旨)

1 放射線副読本改定の理由と経過

福島県の要望とか国会での要求とかではなく、平成26年の改訂から時間が経過したと、当時から状況が変化していることを踏まえて、見直しの時期にきていると判断し、自らの判断として改訂した。

予算については、東日本大震災からの復興に関する事業に係る経費の内、被災地の復興にかかる経費については、復興庁設置法に基づいて各省庁予算を復興庁の予算として復興庁が一括して要求する形になっている。文科省の方での要求担当部署は初等中等教育局教育課程課となる。

文科省が作成する放射線副読本については、補助教材に該当するということ。これを踏まえて、各学校の判断で使用する事となるので、学校教育を歪めるものではない。

議員質問の「風評払拭の正しい教育」とは、児童生徒が放射線に関する科学的な知識を身につけることができるようにするための放射線に関する教育というふうに考えている。

指導要領解説総則編の付録6は平成29年の7月に作った。

副読本の利用状況のフォローアップの調査はまだ行っていない。年内を目処に行いたいと考えている。

「政府の見解ばかりを書いた副読本」ということには、改訂した放射線の副読本の中に、例えば小学生用の副読本の第2章原子力発電所の事故と復興のあゆみに考えてみようということを盛り込んで、原子力発電所の事故において、どのような被害があったかについて考えるといった構成をしている。放射線の副読本については、児童生徒が放射線に関する科学的な知識を身につけ、理解を深めることができるようにすること

を目的として作成したもののだが、この改訂に当たり学校関係者や放射線の専門家等の有識者のご意見を伺い、とりわけ科学的根拠に基づいて、児童生徒の発達段階に応じて表現を工夫しながら内容や構成を検討したもの。このため、政府の見解ばかりを書いた副読本という指摘は当たらないと考えている。

低学年の子供には難しくてわからないということだが、(答えになっていないが)放射線副読本の活用の仕方については、例えば、風評被害について考える際に、授業などで活用して頂きたいと考えている。これに加えて、今回の副読本には、副読本で学んだことを、災害を乗り越えて次代の社会を形成するために克服すべき課題について、家庭で話し合ってみましょうというメッセージを盛り込んでいる。こうしたことから授業などで学んだことを、家庭で話し合うことによって、児童生徒はさらに理解を深めることができると考えている。

教育委員会が困っているのではないかに対して、避難児童生徒に対するいじめを防止する内容、復興が着実に前進している様子を充実させるなど、放射線に関する児童生徒の科学的理解を促すような内容になっていると考えているので、各教育委員会にも活用してほしいと考えている。

2 放射線副読本の内容について

<ばかばかしい内容ですが、文科省の態度を知るには役立ちます。>

はじめに について、

*第1段階で「私たちの身の回りに存在していて、放射線を受ける量をゼロにすることはできない。様々な分野で利用されている」という事実を記載したことは正しい。

*二度と「いじめ」が起こらないように、ここは論理的にいじめのことを指しているの、正しい。

*福島事故の原因、責任を述べていないといわれるが、例えばこれまでの副読本と同様に、中高生の副読本において東電の福島第1原子力発電所では安全対策が不十分であったことに言及している。〈これだけ？〉第1章について、

*核反応のエネルギーの特別な高さを教えることだが、(中高生版に)高波長の短いエネルギーの高いX線やγ線放射線として区別して記載している。〈これではわからない！〉

*被ばくの被害に100mSvに閾値があるかのような表現との指摘について、放射線が人の健康に及ぼす影響については、広島・長崎の研究に基づいて、100mSv以上の放射線は人体にリスクが上昇することが、科学的に明らかになっていることから、そういった内容を記載している。100mSv未満の被曝では健康に影響がないという趣旨ではない。従って、指摘の点については改めるということは考えていない。

*がんの相対リスクの図については、放射線によるがんのリスクをわかりやすく理解してもらうための目的にして、国立がんセンターが公表している資料を基に作成したもの。現在当該センターサイトに掲載されていることから、有効なものと認識している。

*遺伝性影響についても、これまで報告されてないという事実を記載しているもの。遺伝的影響を否定できるという趣旨ではありません。

*被ばくを避ける行動につながる内容にすべき、に対して、改訂した放射線副読本で、福島事故による放射線の健康影響について福島県などが実施している調査結果を基に記載するとともに、非常時に放射線や放射性物質から身を守る方法として、外部被ばくの影響を少なくするためには放射性物質から距離をとる、放射線を遮る、放射線を受ける時間を短くする方法があることや事故の時の食べ物の取り扱いとして、安全性が確認できない野生のものを食べないようにすることなどを記載している。児童生徒がこうした内容を学ぶことによって、放射線に対する科学的な知識を基に行動できるようになると考えている。〈ありえない〉

*公衆の被ばく限度の記述が変わったことについて、放射線被ばくの早見図を公開している原子力研究開発機構、放射線医学総合研究所に確認したところ、以下のような回答をもらった。

ご指摘いただいた部分については、2011年度版副読本に掲載された内容と2014年度版2018年度版の内容は同じであり、違いはありません。早見図については、科学的妥当性を損なわないようにしつつ、わかりやすいものとなるように作成しており、引用されている情報が更新された場合や表現がわかりにくいなどのご意見があった場合適宜改訂を行っております。今回ご指摘いただいた部分は2012年4月に早見図を改訂した際に、修正しましたが、以前の表記ではデータの根拠が不明確であったため、ICRP勧告における管理された線源からの部分を追記して、明確に致しました。このため、2014年度版2018年度版の副読本では新しい図が引用されていると承知しております。なお今回この表現がわかりにくいというご指摘を頂いたものと理解しております。今後もよりわかりやすい図となるよう努めて参ります。〈フクシマ事故の1年後に変更している〉

*放射線被ばくの危険性を書いていないということに、詳しく反論。〈反論を求めていなかったので省略〉

*多くの市議会や教育委員会などが反対していることに対して、避難児童生徒に対するいじめを防止する内容や着実に復興が進むなど放射線に対する児童生徒の理解を促す内容となっている。このため引き続き各教育委員会に対して、様々な機会を活用して今回の副読本の改訂の主旨を説明していきたいと考えている。

第2章 前回の議論の結果、修正するかについて

*食品安全基準が世界で最も厳しいか

前回の意見交換でも伝えたが、今回の改訂に当たっては、関係省庁とも連携を図りながら、内容の見直しについて検討を進めており、日本の基準値についても担当省庁である厚生労働省や復興庁等の関係省庁と調整を踏まえて記載している。その調整において日本の基準値が食品から追加的に受ける放射線の総量がこれ以上の特段の措置をとる必要がないとされる国際的な指標にも沿った年間1ミリシーベルトを超えないよう算出過程の段階において他国に比べ厳しい条件の下で設定されていると伺っている。具体的には、1つ目、放射性物質を含む食品の割合の仮定を高く設定していること。2つ目、年齢区分性別ごとの食品摂取量を考慮していること。また、3つ目放射性セシウム以外の核種の影響を考慮していること。等の厳しい

条件の下で設定されている。以上、総合的に勘案し、日本の基準は世界で最も厳しいレベルであると承知している。

討論（要旨、編集）

(1)放射線副読本再改定は「強化戦略」に基づく

文科省は「強化戦略に基づいたものではない。踏まえて」「検討を進めている中で復興庁の方で強化戦略が策定されたので」としていたが、「強化戦略の方向性と副読本の改訂の方向性は同じものという形になる」「政府の戦略ですので、当然方向性を共有する」と、認めた。

(2)放射線の知識から始める章立ての変更の理由はいじめ防止！議員の要求によるものではない

「避難児童に対するいじめを十分防止する内容」「まずは放射線に関する基礎的な知識が必要だろうと考え、放射線の専門家とかの意見を聞きながらそういった構成がいいだろうとして、文科省として決定した。」

(3)副読本は放射線をわかりやすく教える材料

私たちは「指導要領に基づき教科書がある。放射線の知識を副読本まで作って教える必要があるのか。少なくとも理解できない小学校低学年に副読本を与えたのは誤りである。予算の無駄遣いである。」と追及。

文科省は、「放射線自体をわかりやすく教えるための材料として作った」「低学年については全部ということではなく、風評被害の所とか、ご家庭で考えましょうという所を使える」。

(4)文科省一復興が着実に進んでいることを理解させる、効果を上げている実践の例も聞いている

「避難当事者として、また、原子力発電所の被害当事者としても復興が着実に進んでいるとは思わない。補助教材として有害で不適切だと考えます」の発言に、文科省は「こちらにも放射線副読本を使ってしっかりと進められている実践の例も聞いている。我々の判断とそれから政府の判断と有識者の判断ということ」

私たちが、「被害当事者、市民の意見が反映されることはないのか」というと、「こういう機会は聞く耳を持つ機会だ」。

(5)教科横断的な学びの副読本だ！

文科省は必要な副読本である理由として、「放射線、風評被害、いじめはいろいろところで教えることができる。こういった形の副読本を作成し、利用しやす

いようにしている」「教科横断的な学びは学習指導要領の総則編の中で、ポイントの1つで、教科の横断的な学びを通じて全体的な諸課題に求められる能力を育成していきましょうというところを示した。その全体的な諸課題の1つとして、放射線も取り上げている」「教科横断的な学びに対して、文科省だけではなく、いろいろな指導の参考になるものとかが出ているので、その中の1つ」。

私たちは「放射線の知識のためだけなら、文科省がわざわざ作って全員に下ろすというのはあまりにも重すぎるではないか」と責めた。

(6)福島に寄り添うとは？

「副読本の中で文科大臣は福島に寄り添うと述べている。福島の人にとっては、身の回りの放射線といえば、原発事故の放射線であるのに、副読本では福島の人に寄り添った内容になっていない。事故が起こってなければ、副読本は出されない。」

「放射能は怖くないですよと宣伝すれば、いじめが収まるみたいな短絡的な考えだ。無用な被ばくとか被ばくは避けようと思えば避けることができる、放射線防護を一番分からせないといけないのに、やらないからいじめが起きる。」

「私はクラブ活動の中学生に花壇の脇などに座っているのはダメだよということです。子どもたちは、この副読本を読んで何でダメだか分かりますか。そういう所に座るとなぜまずいかというのは書いてありますか。そこを聞きたい。」等、被害の当事者たちからの追及にも、

文科省は、「実際に身の回りの放射線を測ってみましょうという内容は盛り込んである。実際に測定しながら学んでいただくということが考えられます」「科学的に分かっていることを書かせていただいている」

(8)文科省は子供を守る？「放射線を受ける量をできるだけ少なくすることが大切です」と書いた

復興庁との違いはあるらしい。これは2013年度版から入っている。子供を守る立場にたってほしいが、この分を入れただけでは守れていないのではないか。

(9)100mSv以上で科学的にがんのリスクが明らかになっている

100mSv以下については延べないひどさは、認めなかった。

(10)「放射線はゼロにできません」を4回も一隠れたカリキュラムと追及した

神奈川の教員から「副読本の一番最初は『放射線を受ける量をゼロにすることができません』から始まる。この言葉が4回も出てくる。その他にもそれに類する言葉が、沢山出てくる。放射線の危険性は書かない。この放射線副読本と反対の立場で、放射線は危険である、福島では実害がこんなにあるというような教材を作って、学校で使われたらどうか。そういうことを文科省はやっている」話すが、文科省は科学的事実を書いていると譲らない。

「被ばくを避ける具体性に欠けるようなものをなぜ作るのか」「何で生徒に考えさせるいろんな情報を提供して考えさせる教材を作らないのか」にも答ええない。

「副読本は、基本的に政府がやっていることをそのまま文科省が副読本にして、全国に配っている。これは異常におかしなことだと思う。」にも答えなし。

静岡の質問には、後日、回答を約束

静岡のWです。内容について、いくつか教えてください。中高生の副読本の1メートル高さの空間線量のところで、福島原発の直近以外は国内と同水準と書かれていますが、ここの直近とは何キロメートル位ですか。先程言われたのですが、土壌汚染が示されていなくて、今では福島市内でも放射線管理区域を越える高い所がある。先程測って見ようということがありましたが、この絵では何のマスクも防護もしていない状態で測ってみようと言われている。こうして子どもたちに危険な地域を自ら測らせることは、とても非人道的だと思います。14ページの下、「国は住民に対して速

やかに避難指示や食品の出荷制限などの対応を行いました。」と書いていますが、すみやかな避難指示とは19日に行われた20キロ範囲のことでしょうか。それとも、1ヶ月後に避難指示を出したい飯舘村も入っているのかを知りたい。原子力防災、私たち子を持つ親としては、健康をとっても大切に思っている。ここで中高生の20ページに長袖のシャツを着れば放射能を防ぐことができると書いてあるが、実際長袖シャツを着て避難したことで大量の放射能を服に吸着してしまったことで、避難所には入れなかった人たちもいます。実際その教訓を得て、今各地域で出されている放射能防護はカップを着て、避難所に行けばカップを脱ぐといことがしっかり書かれている。こうした福島原発事故の教訓を得ていないものを載せて、また被ばくさせてしまうものがどうして載っているのか、教えてもらいたい。

(文科省)今頂いた質問に関しては、確認させていただきたいところもありますので、後日答えさせていただきます。

(二重線は回答を約束した部分の印)

交渉について

それぞれの団体が、交渉し、研究してきたことが実を結び、政府側を追い込めるようになってきた。政府は決して、まちがっていたと認めないが、改めさせることはできると考えられる。しかし、安倍政権、荻生田文科大臣の下では困難が予想される！

復興庁、文科省ともに、後で答えるとした事項が残った。これについては、福島みずほ事務所を通じて話を続ける。

全国交流会

- *運動の現状を交流、共有できた。
- *小中高の学校の教師、もと教師、教科書の編集者、学校現場をよく知る人が全国から集まり、教育の問題として議論できた。
- *福島の実態、避難者の意見、支援にかかわっている人たちの意見を聞き、共有することができた。
- *「強化戦略」が福島事故被害者切り捨てであるとはっきりさせ、その中心に「放射線副読本」があると確認した。
- *放射線の被害は大したことない(正しい知識)、「被害を言いたてるといじめが起き、風評被害が広がるぞ、黙っておれ」が政府の主張であると認識した。
- *フクシマをなかったことにする政策は、ICRP 勧告改定に現れたように原発重大事故をこれから世界中で引き起こす路線であると一致した。
- *これまで、それぞれに進めてきた運動の成果を集め、交渉にも生かした。交流の継続を目指す。
- *運動を全国に広げ、教育委員会や学校、議会、子どもの保護者にも働きかけようと確認した。

自己紹介と活動紹介、交流のあらまし(要約)

発言者は記号としました。() は発言者のお名前がはっきりしない場合です。

Me: 大阪の退職教員です。副読本の問題とともに若狭連帯行動ネットワークで反原発の運動を行っています。

Tt: ヒバク反対キャンペーンの代表です。福島の人たちをいっしょに運動しています。

Og: 静岡市の議員です。静岡市教育委員会は、「副読本」を配布したが議会での議論の結果、市民の作った補助資料と合わせて授業するということにした。副読本の抜粋資料を読んでアンケートに答えてもらい、次に市民が作った補助資料を読んでアンケートに答えてもらう、その結果どう意見がちがうか、アンケート形式で書いてもらう。10月にやってみることになっている。結果は、皆さんと共有したい。

Mt: 緑の党です。副読本について各自治体でやれることをやっていくことにしている。議会で質問、決議など。オリンピック中止という運動もどうするか検討中。鈴木: 横田基地のそばに住んでいる。都立高校退職者の交流、地元の子もたちや、親との交流、福島県白河で原発事故の記録を保存・展示する原発災害情報センターの活動をしている。

Ky: 町田から来ました。「学習する会」で勉強させてもらっている。南相馬市尾高の出身、母が住んでいる。避難した人、移住した人、帰還した人、残っていた人、一緒に「故郷をとられてしまった」と心折れている。故郷を離れて 50 年だが、この人たちのために何かしたいと思ってよく故郷へかよっている。復興したいという活動にも参加している。復興ということは批判も受けるが、針の穴を通るほど難しいかもしれないが、やろうと思う。

Kn: 川崎市から来ました。会津に最近帰って、小学校の先生の友人に聞いた。「何にもないときに、副読本は子どもたちに教えるのに少し参考になった」と言っていた。会津と浜通りとのギャップも感じた。

Nk: 放射線被ばくを学習する会の代表です。去年の夏、厚労省、消費者庁、復興庁と飲料水食品規準の問題で交渉を持った、その後、「放射線のホント」の廃刊署名を行っている。

Mz: 原発はごめんだヒロシマ市民の会、脱原発中国電力株主の会もやっている。資料集に、広島でやった教育委員会への働きかけの報告が入っている。参考にしてください。2011 年のとき、教育現場にいたので仲間と取り組んだ。今回もしっかり取り組む。

Nm: 内部被ばくを考える市民の会、埼玉で活動している。京都からのメールで今日のことを知った。副読本について知りたいと参加した。

Sg: 高木学校、放射線被ばくを学習する会で勉強している。副読本については以前から参加させてもらっている。ICRP 勧告改訂が今パブコメ中。ICRP が実際には政府の基準になるので、ぜひ、出してください。

Tj: 学習する会。悩んでいること。この国は、核の重大事故と人類が共存する社会にする、トップランナーになろうといっていると考えられること。それが、副読本であり、ICRP 改訂である。また、初期の緊急被ばく医

療をぶっ壊してしまった人をヒーローにしまった NHK の 2 時間番組を日本ジャーナリスト協会が表彰した。これも、トップランナーと通じているのではないか。

Oo: 福島県教組に所属しています。組合では事故後、放射線教育対策委員会を立ち上げ、年に 3,4 回学習会を行い、学校現場に副読本に対抗する資料を配る。地道に活動している。原発災害についてはずっとやっていく。私は今年から現場を終わったので、週 1 日組合に通い、高教組と一緒に教育研究所の仕事をしています。栗原: 学習する会世話人。川口市。「ホント」廃刊署名の担当、5 月くらいまでで 8450 筆くらい。一人一人の積み上げだ。署名をとる中で直接話ができる、初めての体験だった。9 条で集まる人たちは、放射線のホントを知らない、復興庁があることも知らない。私たちは少数派だが、やることの値打ちがある。

Ad: 日消連反原発部会です。年に 2、3 回は福島に行くが、浜通りでは年寄りしか見かけない。モニタリングポストの空間線量は低い草むらは高い。こういうことを教えなければならない。副読本はそうっていない。

Km: 事故から 1 年くらいして、社会にも関わらないといけな思考え活動している。世論を変えるべきと思って原発反対のワッペンを配る活動をしている。16 万枚配った。たんぼぼ舎にも参加、最近チラシを戸別配布している。300 くらいの課題の一括署名をやっではどうか。

Kr: 横浜から来ました。定年退職後です。高校生の物理、化学の検定教科書の編集をやっていた。今年から新しい指導要領の教科書(高校)になっている。検定があり、これまでの教科書は初版「副読本」程度の内容になっていた。自主的に書かない状態だった。事故後、文科省副読本改訂(2014)もあり、教科書も少しは変わったと思うが 日本科学技術ジャーナリスト会議で、原発賛成の人、反対の人あるが、そこで放射線副読本を検討することになり、ここに参加した。初版をいただいてありがとうございます。皆さんの考えを聞いて勉強になった。よろしくお願いします。

Hr: 元教員、日野市から来ました。社会科を教えていたが現場を離れて長い。当時は、原発・核兵器に関する実質的副読本を組合でつくって、それを軸に教えていた。「身の回りの放射線をゼロにはできません」、こんな教え方はしなかった。2 つの被ばく(広島・長崎)から教えた。身の回りの放射線も教えた。放射線の利用ではレントゲンがあるが、組合運動として健康診断の中でレントゲンをできるだけ使わせない運動を長くやってきた。最近のことだが、自分の病気のため 3 か月に 1 回レントゲンを取られる、ついに医者に止めてくれと言った。沖縄と原発、両方やるのは大変。

Nm: 埼玉、所沢から来ました、井戸川裁判の世話人です。2011 河合町、南相馬市、いわきに入った。2013、14 年には二本松に移った浪江小学校へ通った。井戸川さんには「お前が行くと、安全だと言っていることに

なる、行くな」と言われたが、被害者のみなさんいろいろな悩みを抱えていらっしやるので寄り添いたいと通っている。

Ys：神奈川県藤沢市から来ました。「原子力教育を考える会」で活動しています。「放射線の本当のこと」という DVD を出している「放射線の「ホント」」が出た時にはびっくりした。会の HP に放射線副読本の全面批判を載せている、今やっているところ、見てください。

Hs：神奈川茅ヶ崎市から来ました。「原子力教育を考える会」です。よくわかる原子力という本を作った。崎山さんもいっしょにやっています。DVD は授業で使えるように文句をつけられないようにつくっている。環境教育をやってきた中で本をまとめた「日本の若者はなぜ社会的エネルギーを失ったのか」、社会に潜む隠れたカリキュラムを問題にしている、読んでください。

Mr：郡山市から子ども 2 人を連れて大阪市に避難、夫は 8 年間、月 1 度大阪に来る。「東日本大震災避難者の会」を大阪でやっている。ママたちのグループで学校の防災教育や人権教育の中で話をさせてもらう活動もしている。原賠訴訟大阪の原告団長もしている。原発事故を経験して、無用な被ばくをさせる権利を主張している。これは人権、憲法の問題だが、民事訴訟という形で争っている。原発被害者訴訟全国連絡会もあり、協力してやっている。その中で国の責任を認める判決をいくつも得ている。しかし、最近の千葉、岐阜愛知訴訟では国の責任を認めない判決が出た。国は原発安全神話に変えて、放射線安全神話を掲げている。核と共存するという政策だ。次の世代の人たちが声を上げられない、民主主義の問題だ。無用な被ばくを避ける権利、基本的人権、普遍的な権利の侵害を全国に訴えていきたい。

片岡：4 月に足を大怪我、頭も打った。CT をとるとき、線量はどのくらいと聞いたら、自然放射線と変わらない、大したことないと言われた。検査技師でも大したことないと説明する。副読本で、医療被ばくと比べるのであれば医療被ばくのリスクを説明しなければならぬ。被ばくの深刻さを知らせないといけないと思う。今、ICRP 勧告の改訂問題に取り組んでいる。これも重大です。

Sd：ヒバク反対キャンペーンです。原発に反対する運動とともに核兵器の問題にも取り組んでいる。トランプは小型核兵器を使おうとしている。安倍もこれと結んでやっている。

In：チェルノブイリヒバクシャ救援関西です。福島の方で自分たちの被害を言えない、気持ちを言えない状況がある。政府は全省庁上げて被害がなかったことにしようとしている。

Nn：奈良から。退職教員、非常勤をしながら組合活動、脱原発をやっている。副読本の署名のとりまとめの仕事を引き受けている。現在、200 くらいの個人・団体が署名に取り組んでいる。まだ、取組中のところもある。署名は、数も大事なので、大きい団体にも働きかけたい。副読本をどうするかでは、教育委員会や学校にも働きかけたい。さようなら原発奈良県民会議があ

り、また奈良県には脱原発議員連盟（3.11 以降超党派で）もあり、これらの大きい組織にも取り組んでもらって、避難している人たちともいっしょに教育委員会へ働きかけたいと思う。

In：副読本署名や運動はどういう状況にあるのか。共通認識にしたい。「資料集」の表紙に、放射線副読本は「モニタリングポスト撤去、汚染水放出、20mSV 帰還強要と一体の世論操作」とした。副読本はどういう政策なのか、皆さんに何と伝えたらよいのか、分かり易いキャッチフレーズを作りたい。

大阪の渡辺さんの報告、教育委員会へ電話してくれました。今年 10 月から学校へ配布らしいと分りました。

未来につなげる東海ネット、大沼明子さんも愛知教育委員会へ働きかけてくれました。大阪ではたくさんの市町で働きかけを行った報告が届いています。滋賀県の野洲市の回収だけが報道されましたが、配布を止めているところはかなりあります。圧力を警戒して公表は控えています。小金井市は反対の決議を行い、政府に提出している。みどりの党も取り組むということです。全国で、教育委員会や学校へ働きかけてください。

Mz：上関原発止めよう！広島ネットワークの、広島県教委、広島市教委へ行ったり、広島市内全学校に電話した報告が資料集に入っている。教育委員会はほとんど知らないという感じ。文科省の指示を下しただけ。指導主事も本体を持っていない。足りないようだ。広島では、全て上位下達なので教育委員会さえ何も考えてない。家庭に持って帰らせた学校が多い。教委はそれもつかんでいない。忙しいのでまだ配っていませんという学校もあった。

2011 年のときには、福島大学の先生たちがつくった教科書を組合員に配って勉強し、反対の運動を行った。

In：資料集に文科省の指示文書が入っている。だから、教育委員会は知っているけれども、知らないふりをしている。静岡市教育委員会は各教科での教え方まで指示を出している。

Kr：第 3 版、誰が書いたのか。文科省は自分たちが書いたと言っていたが、実際誰が執筆か。この副読本は検定なら不合格だ。分りにくい。文章になっていない。

In：強化戦略に書いてあるように書き直させられたことは間違いない。今年度中は、署名と運動を続けたい。交流会もやりたい。内容の、批判もやっていきたい。メーリングリストという希望もあるが、困難もあるので、メールで情報を福岡に届けてくれたら、皆さんにお届けします。

今日の参加者は 39 人。自由討論に移ります。

Mz：2018 年にできたことを考えると、復興庁の放射線のホントは副読本の元になっていると考えられる。オリンピックまでに復興したいという政府見解を変えさせるのは難しい。オリンピックの後、もっと良い教科書を文科省に作らせるのはどうか。

倉又：執筆者が書かれていない。復興庁には専門家の議事録があるが、副読本はこれを作った過程が示されていない。書いたのはさっきの専門官か？

In：副読本を作った経過、どのような議論が行われた

か。専門家はどのような経過で選ばれたのか。森松さんのような人も入れるべきだ。なんのためにつくったか

Kt：2013 年のはこちらの意見も入っている。副読本には政権の方針が入っていると思う。

In：初版は研究開発局が事故前に作った。原子力学会が文科省に働きかけて放射線・原子力を指導要領に入れ、そこを教えるときの副読本として作り(電源特別会計)、希望する学校に配る予定だった。事故と関係なく作っていた。事故後、急遽、他の予算まで回して全生徒に配布した。これには批判が巻き起こり、民主党政権の事業仕分けで不適切とされた。その結果、修正として一般会計を使って、初等中等局の手で 2013 年度版が作られたと考えられる。

今回は、強化戦略に従い、国会で追及され、章立てを変えよと言われたが、文科省が自発的に改訂したとされている。3 回とも予算の出所がちがう。

()：最初の副読本は放射線教育フォーラム雑誌に、これから原発推進の障害は放射線に対する不安だ、放射線安全教育が必要だと書いてある。2 版は違うが、原発推進のためのものだ。

Tj：アドバイザーボードと副読本の助言者のうち重なっているのは、神田玲子と高村昇、この 2 人が中心だろう。実際に書いたのは専門官ではないか。専門官はまともに書こうと努力したと思うが、この人たちがぐちゃぐちゃにし、さらに原子力ムラが書き換えさせたのかもしれない。高村は川内村に長崎大学の出張所ができた時、そこに入っている。リスクコミュニケーションの日本のトップとされている。

()：これで洗脳するには下手過ぎ

Og：副読本を作ったのは、原発を増やすのが目標だろう。

Mr：復興庁の「放射線のホント」と文科省の「副読本」はセットだ。ホントは 2 万部、フェイスブックでかわいいと拡がった面もある。そのカウンター本、「ホントのホント」に人気が出たりした。副読本は、刷った数が全然違う、私は危機感を持っている。(原発推進政策を)無批判に浸透させることを彼らは着々とやっている。反対の意見が入っていない。批判も同数、税金を使って配らせるべきだ。私の家の子どもの学校ではよく見張っていたためか、配られなかった。副読本は税金を使って配っている。予算の無駄遣いだ。

Kr：教科書ではないから検定をとっていない。教師が自分で作った教材を自由に使ってよいのか。

In：それほど自由はない。教師には選ぶ権利があるが、校長や保護者のチェックはある。文科省が作って押し付けることが特に問題だ。

Og：静岡市では、副読本に変わる資料を使ってよいが、その時にはこの副読本と両方を使ってやってくださいということになった。

Nk：2 回目の副読本を作ったのは民主党政権か？(そ

うだと会場で確認)。文科省と復興庁を分断した方がよい。文科省は 100mSv 以下でも安全とは言えないと始めに言ったように思う。

In：しかし、政府は安倍で統一されている。

Tj：再改定版副読本の 10 ページに 1mSv の外部と内部被ばくの影響は変わらない、つまり「影響ある」と書いてあるのではないか。

Tt：シーベルトがあるということは影響があるという意味。

Sg：作成の経過については前川喜平さんに聞いてはどうか。この副読本は洗脳型としてよくできている。考えてみよう、自分で考えて振り返ってみよう、どんな被害が起きているか考えてみようとし、そうすると被害は「いじめ、風評被害」だと「自分で考えつくように」作ってある。これが洗脳だ。

今パブコメ中の ICRP 改訂でも、放射線の影響以外の被害がいっぱい書いてある。放射線の被害を隠す、巧妙なやり方だ。このような論理を世界に広げようとしている。

Tj：福島で共感を得ている考え方は「放射線から人々を守る対策の方が、被害が大きい」ということ。それを全国に広げるものが「副読本」とか「ホント」だ。
Sg：(被害を黙って受け入れるか、放射線の被害を言い立てて風評被害を広げるか)どっちをとるかという感じ。自分に選択させる。

Mr：実際に被ばくさせられているにもかかわらず、福島事故の被害が多様過ぎるのを逆手にとって被ばくを霞ませる。

In：被ばくの被害を騒ぎ立てると、そのせいで死ぬ人が出る。被ばくの被害を騒ぎ立てる人は加害者だという論理。

Mr：被ばくの被害を言えば風評被害が起きるよという言論封じ。被ばくの被害を言うとオリンピックに響く、オリンピックを邪魔するのかとなる。被ばくを言う人は差別する人ですよという本も出た。

Km：「東電とともに原発をなくす会」の東電との会合のために、中抜けしていました。そこでは東電が被害者に対して如何に誠意がないかと問題にした。文芸春秋の記事も議論された。

()：韓国、他の外国からも食品汚染が問題にされている。アンダーコントロールはウソだという外国の報道もある。

()：汚染水放出も問題。

Kt：放射線は流通食品では検出下限値以下になっている。しかし、野生のものでは高い。子どもたちに本当のことを教えなければならない。この「副読本」は読めば、子どもだけでなく親も信じる、これを何とかしなければならない。

In：今日の議論は有意義だった。次の運動の拡大に生かしたい。